不審庵

太宰治

拝啓。暑中の御見舞いを兼ね、いささか老生日頃の愚衷など可申述候（もうしのぶべくそうろう）。老生すこしく思うところ有之（これあり）、近来ふたたび茶道の稽古にふけり居り候。ふたたび、とは、唐突にしていかにも虚飾の言の如く思召（おぼしめ）し、れいの御賢明の苦笑など漏し給わんと察せられ候も、何をか隠し申すべき、われ幼少の頃より茶道を好み、実父孫左衛門殿より手ほどきを受け、この道を伝授せらるる事数年に及び申候えども、悲しい哉（かな）、わが性鈍にしてその真趣を究（きわむ）る能（あた）わず、しかのみならず、わが一挙手一投足はなはだ粗野にして見苦しく、われも実父も共に呆（あき）れ、孫左衛門殿逝去（せいきょ）の後は、われその道を好

むと雖も指南を乞うべき方便を知らず、なおまた身辺に世俗の雑用ようやく繁く、心ならずも次第にこの道より遠ざかり、父祖伝来の茶道具をも、ぽつりぽつりと売払い、いまは全く茶道と絶縁の浅ましき境涯と相成申候ところ、近来すこしく深き所感も有之候まま、まことに数十年振りにて、ひそかに茶道の独習を試み、いささかこの道の妙訣を感得仕り申候ものの如き実情に御座候。

それ覆載の間、朝野の別を問わず、人皆、各自の天職に心力を労すればまたその労を慰むるの娯楽なかるべからざるは、いかにも本然の理と被存候。而して

人間の娯楽にはすこしく風流の趣向、または高尚の工夫なくんば、かの下等動物などの、もの食いて喉(のど)を鳴らすの図とさも似たる浅ましき風情と相成果申すべく、すなわち各人その好む所に従い、或いは詩歌管絃、或いは囲碁挿花、謡曲舞踏などさまざまの趣向をこらすは、これ万物の霊長たる所以(ゆえん)と愚案じ申次第に御座候。然りと雖(いえど)も相互に於ける身分の貴賤、貧富の隔壁を超越仕り真に朋友としての交誼を親密ならしめ、しかも起居の礼を失わず談話の節を紊(みだ)さず、質素を旨とし驕奢(きょうしゃ)を排し、飲食もまた度に適して主客共に清雅の和楽を尽すものは、じつに茶道に如(し)くはなかるべしと

被存候。往昔、兵馬倥※（こうそう）［＃「にんべん＋總のつくり」、389-10］武門勇を競い、風流まったく廃せられし時と雖も、ひとり茶道のみは残りて存し、よく英雄の心をやわらげ、昨日は仇讐（きゅうしゅう）相視るの間も茶道の徳に依（よ）りて今日は兄弟相親むの交りを致せしもの少しとせずとやら聞及申候。まことに茶道は最も遜譲（そんじょう）の徳を貴び、かつは豪奢の風を制するを以（もっ）て、いやしくもこの道を解すれば、おのれを慎んで人に驕（おご）らず永く朋友の交誼を保たしめ、また酒色に耽（ふけ）りて一身を誤り一家を破るの憂いも無く、このゆえに月卿雲客（げっけいうんかく）または武将の志高き者は挙（こぞ）ってこの道を学びし形跡は、ものの本に於い

ていちじるしく明白に御座候。

　そもそも茶道は、遠く鎌倉幕府のはじめに当り五山の僧支那より伝来せしめたりとは定説に近く、また足利氏の初世、京都に於いて佐々木道誉等、大小の侯伯を集めて茶の会を開きし事は伝記にも見えたる所なれども、これらは奇物名品をつらね、珍味佳肴（かこう）を供し、華美相競うていたずらに奢侈（しゃし）の風を誇りしに過ぎざるていたらくなれば、未だ以て真誠の茶道を解するものとは称し難く、降（くだ）って義政公の時代に及び、珠光なるもの出でて初めて台子真行（だいすしんぎょう）の法を講じ、之（これ）を紹鷗（しょうおう）に伝え、紹鷗また之を利休居士に伝授申候事、ものの本

に相見え申候。まことにこの利休居士、豊太閤に仕えてはじめて草畧の茶を開き、この時よりして茶道大いに本朝に行われ、名門豪戸競うて之を玩味(がんみ)し給うとは雖も、その趣旨たるや、みだりに重宝珍器を羅列して豪奢を誇るの顰(ひん)に倣(なら)わず、閑雅の草庵に席を設けて巧みに新古精粗の器物を交置し、淳朴(じゅんぼく)を旨とし清潔を貴び能く礼譲の道を修め、主客応酬の式頗(すこぶ)る簡易にしてしかもなお雅致を存し、富貴も驕奢に流れず貧賤も鄙陋(ひろう)に陥らず、おのおの其分に応じて楽しみを尽すを以て極意となすが如きものなれば、この聖戦下に於いても最適の趣味ならんかと思量致し、近来いささか

この道に就きて修練仕り申候ところ、卒然としてその奥義を察知するにいたり、このよろこびをわれ一人の胸底に秘するも益なく惜しき事に御座候えば、明後日午後二時を期して老生日頃昵懇(じっこん)の若き朋友二、三人を招待仕り、ささやかなる茶会を開催致したく、貴殿も万障繰合せ御出席然るべく無理にもおすすめ申上候。流水濁らず、奔湍(ほんたん)腐らず、御心境日々に新たなる事こそ、貴殿の如き芸術家志望の者には望ましく被存候。茶会御出席に依り御心魂の新粧をも期し得べく、決してむだの事には無之(これなく)、まずは欣然(きんぜん)御応諾当然と心得申者に御座候。頓首。

ことしの夏、私は、このようなお手紙を、れいの黄村先生から、いただいたのである。黄村先生とは、どんな御人物であるか、それに就いては、以前もしばしば御紹介申し上げた筈であるから、いまは繰り返して言わないけれども、私たち後輩に対して常に卓抜の教訓を垂れ給い、ときたま失敗する事があるとはいうものの、とにかく悲痛な理想主義者のひとりであると言っても敢えて過称ではなかろうと思われる。その黄村先生から、私はお茶の招待を受けたのである。招待、とは言っても、ほとんど命令に近いくらいに強硬な誘引である。否も応もなく、私は出席せざるを得なく

なったのである。

けれども、野暮（やぼ）な私には、お茶の席などそんな風流の場所に出た経験は生れてから未だいちども無い。黄村先生は、そのような不粋（ぶすい）な私をお茶に招待して、私のぶざまな一挙手一投足をここぞとばかり嘲笑し、かつは叱咤（しった）し、かつは教訓する所存なのかも知れない。油断がならぬ。私は先生のお手紙を拝誦して、すぐさま外出し、近所の或る優雅な友人の宅を訪れた。

「君のとこに、何かお茶の事を書いた本が無いかね。」

私は時々この上品な友人から、その蔵書を貸してもらっているのである。

「こんどはお茶の本か。多分、あるだろうと思うけど、君もいろんなものを読むんだね。お茶とは、また。」友人はいぶかしげの顔をした。

「茶道読本」とか「茶の湯客の心得」とか、そんな本を四冊も借りて私は家へ帰り、片端から読破した。茶道と日本精神、侘（わび）の心境、茶道の起原、発達の歴史、珠光、紹鷗、利休の茶道。なかなか茶道も、たいへんなものだ。茶室、茶庭、茶器、掛物、懐石の料理献立（こんだて）、読むにしたがって私にも興が湧いて来た。茶会というものは、ただ神妙にお茶を一服御馳走になるだけのものかと思っていたら、そうではない。さまざまの結構

な料理が出る。酒も出る。まさかこの聖戦下に、こんな贅沢は出来るわけがないし、また失礼ながらあまり裕福とは見受けられない黄村先生のお茶会には、こんな饗応の一つも期待出来ず、まあせいぜい一ぱいの薄茶にありつけるくらいのところであろうとは思いながらも、このような、おいしそうな献立は、ただ読むだけでも充分に楽しいものである。さて、最後は、お茶客の心得である。これが、いまの私にとって、最も大切な項目である。お茶の席に於いて大いなるへまを演じ、先生に叱咤せられたりなどする事のないように、細心に独習研鑽して置かなければならぬ。

まず招待を受けた時には、すぐさま招待の御礼を言上しなければならぬ。これは、会主のお宅へ参上してお礼を申し上げるのが本式なのであるが、手紙でも差しつかえ無い。ただ、その御礼の手紙には、必ず当日は出席する、と、その必ずという文字を忘れてはいけないのである。その必ずという文字は、利休の「客之次第」の秘伝にさえなっているのである。私は先生に、速達郵便でもって御礼状を発した。必ずという文字を、ひどく大きく書いてしまったが、そんなに大きく書く必要は無かったのである。いよいよ茶会の当日には、まず会主のお宅の玄関に於いて客たちが勢揃（せいぞろ）いして席

順などを定めるのであるが、つねに静粛を旨とし、大声で雑談をはじめたり、または傍若無人の馬鹿笑いなどするのは、もっての他の事なのである。それから主人の迎附けがあって、その案内に従い茶席におそるおそる躙(にじ)り入るのであるが、入席したらまず第一に、釜(かま)の前に至り炉ならびに釜をつくづくと拝見して歎息をもらし、それから床の間の前に膝行(しっこう)して、床の掛軸を見上げ見下し、さらに大きく溜息をついて、さても見事、とわざとらしくないように小声で言うのである。ふりかえって主人に掛軸の因縁などを、にやにや笑ったりせず、仔細(しさい)らしい顔をして尋ねると、主人はさら

に大いに喜ぶのである。因縁を尋ねるとは言っても、あまり突込んだ質問は避けるべきである。どこから買ったか、値段はいくら、にせものじゃないか、借りて来たのだろうなどと、いやに疑い深くしつっこく尋ねるときらわれるのである。炉と釜と床の間をほめる事。これは最も大切である。これを忘れた者は茶客の資格が無いものと見なされて馬鹿を見る事になるのである。夏は炉のかわりに風炉（ふろ）を備えて置く事になっているが、風炉といっても、据風呂ではない。さすがに入浴の設備まではしていない。まあ、七輪（しちりん）の上品なものと思って居れば間違いはなかろう。風炉と釜と床の

間、これに対して歎息を発し、次は炭手前の拝見である。主人が炉に炭をつぐのを、いざり寄って拝見して、またも深い溜息をもらす。さすがは、と言って膝（ひざ）を打って感嘆する人も昔はあったが、それはあまり大袈裟（おおげさ）すぎるので、いまは、はやらない。溜息だけでよいのである。それから、香合をほめる事などもあって、いよいよ懐石料理と酒が出るのであるが、黄村先生は多分この辺は省略して、すぐに薄茶という事になるのではあるまいか。聖戦下、贅沢なことを望んではならぬ。先生に於いても、必ずやこの際、極端に質素な茶会を催し、以て私たち後輩にきびしい教訓を垂れ

て下さるおつもりに違いない。私は懐石料理の作法に就いての勉強はいい加減にして、薄茶のいただき方だけを念いりに独習して置いた。そうして私のそのような予想は果して当っていたのであったが、それにしても、あまりに質素な茶会だったので、どうにも、ひどい騒ぎになってしまった。

茶会の当日、私は、たった一足しかない取って置きの新しい紺足袋をはいて家を出た。服装まずしくとも足袋は必ず新しきを穿（うが）つべし、と茶の湯客の心得に書かれてある。省線の阿佐ヶ谷駅で降りて、南側の改札口を出た時、私は私の名を呼ばれた。二人の大学生が

立っている。いずれも黄村先生のお弟子の文科大学生であって、私とは既に顔馴染のひとたちである。

「やあ、君たちも。」

「ええ、」若いほうの瀬尾君は、口をゆがめて首肯いた。ひどくしょげ返っている様子であった。「困ってしまいました。」

「また油をしぼられるんじゃねえかな、」ことし大学を卒業してすぐに海軍へ志願する筈になっている松野君も、さすがに腐り切っているようであった。「茶の湯だなんて、とんでもない事をはじめるので、全くかなわねえや。」

「いや、大丈夫だ。」私は、このふさぎ込んでいる大学生たちに勇気を与えたかった。「大丈夫だ。僕はいささか研鑽して来たからね、きょうは何でも僕のするとおりに振舞っておれば間違いない。」

「そうでしょうか。」瀬尾君は少し元気を恢復（かいふく）した様子で、「実は僕たちも、あなた一人をあてにして、さっきからここでお待ちしていたのです。きっとあなたも招待されていると思いましたから。」

「いや、そんなにあてにされると僕も少し困るのだが。」

私たち三人は、力無く笑った。

先生は、いつも、離れのほうにいらっしゃる。離れは、庭に面した六畳間とそれに続く三畳間と、二間あって、その二間を先生がもっぱら独占して居られる。御家族の方たちは、みんな母屋のほうにいらっしゃって、私たちのために時たま、番茶や、かぼちゃの煮たのなどを持ち運んで来られる他は、めったに顔をお出しなさらぬ。

黄村先生は、その日、庭に面した六畳間にふんどし一つのお姿で寝ころび、本を読んで居られた。おそるおそる縁先に歩み寄る私たち三人を見つけて、むっくり起き上り、

「やあ、来たか。暑いじゃないか。あがり給え。着ているものを脱いで、はだかになると涼しいよ。」茶会も何もお忘れになっているようにさえ見えた。

けれども私たちは油断をしない。先生の御胸中にどのような計略があるのかわかったものでない。私たちは縁先に立ち並び、無言でうやうやしくお辞儀をした。先生は一瞬けげんな顔をなさったようだが、私たちはそれにはかまわず、順々に縁側に躙（にじ）り上り、さて私は部屋を見廻したが、風炉も釜も無い。ふだんのままのお部屋である。私は少し狼狽（ろうばい）した。頸（くび）を伸ばして隣りの三畳間を覗くと、三畳間の隅に、こわれかかった七

輪が置かれてあって、その上に汚く煤けたアルミニュームの薬鑵がかけられている。これだと思った。そろそろと膝行して三畳間に進み、学生たちもおくれては一大事というような緊張の面持でぴったり私に附き添って膝行する。私たちは七輪の前に列座して畳に両手をつき、つくづくとその七輪と薬鑵を眺めた。期せずして三人同時に、おのずから溜息が出た。

「そんなものは、見なくたっていい。」先生は不機嫌そうな口調でおっしゃった。けれども先生には、どのような深い魂胆があるのか、わかったものでない。油断がならぬ。

「この釜は、」と私はその由緒をお尋ねしようとしたが、なんと言っていいのか見当もつかない。「ずいぶん使い古したものでしょう。」まずい事を言った。

「つまらん事を言うなよ。」先生はいよいよ不機嫌である。

「でも、ずいぶん時代が、――」

「くだらんお世辞はやめ給え。それは駅前の金物屋から四、五年前に二円で買って来たものだ。そんなものを褒める奴があるか。」

どうも勝手が違う。けれども私は、あくまでも「茶道読本」で教えられた正しい作法を守ろうと思った。

釜の拝見の次には床の間の拝見である。私たちは六畳間の床の間の前に集って掛軸を眺めた。相変らずの佐藤一斎先生の書である。黄村先生には、この掛軸一本しか無いようである。私は掛軸の文句を低く音読した。

寒暑栄枯天地之呼吸也。苦楽寵辱（ちょうじょく）人生之呼吸也。達者ニ在ツテハ何ゾ必ズシモ其遽（にわ）カニ至ルヲ驚カン哉（や）。

これは先日、先生から読み方を教えられたばかりなので、私には何の苦も無く読めるのである。

「流石（さすが）にいい句ですね。」私はまた下手（へた）なお追従（ついしょう）を言った。「筆蹟にも気品があります。」

「何を言っているんだ。君はこないだ、贋物じゃないかなんて言って、けちを附けてたじゃないか。」

「そうでしたかね。」私は赤面した。

「お茶を飲みに来たんだろう？」

「そうです。」

私たちは部屋の隅にしりぞいて、かしこまった。

「それじゃ、はじめよう。」先生は立ち上って隣りの三畳間へ行き、襖をぴたりとしめてしまった。

「これからどうなるんです。」瀬尾君は小声で私に尋ねた。

「僕にも、よくわからないんですがね、」何しろ、まる

で勝手が違ってしまったので私は不安でならなかった。
「普通の茶会だったら、これから炭手前の拝見とか、香合一覧の事などがあって、それから、御馳走が出て、酒が出て、それから、——」
「酒も出るのですか。」松野君は、うれしそうな顔をした。
「いや、それは時節柄、省略するだろうと思うけど、いまに薄茶が出るでしょう。まあ、これから一つ、先生の薄茶のお手前を拝見するという事になるんじゃないでしょうか。」私にもあまり自信が無い。
じゃぼじゃぼじゃぼという奇怪な音が隣室から聞えた。

茶筅（ちゃせん）でお茶を掻（か）き廻しているような音でもあるが、どうも、それにしてはひどく乱暴な騒々しい音である。私は聞き耳を立て、

「おや、もうお手前がはじまったのかしら。お手前は必ず拝見しなければならぬ事になっているのだけど。」

気が気でなかった。襖はぴったりしめ切られている。先生は一体、どんな事をやらかして居られるのか、じゃぼじゃぼという音ばかり、絶えまなくかまびすしく聞えて来て、時たま、ううむという先生の呻（うめ）き声さえまじる有様になって来たので、私たちは不安のあまり立ち上った。

「先生！」と私は襖をへだて呼びかけた。「お手前を拝見したいのですが。」

「あ、あけちゃいけねえ。」という先生のひどく狼狽したような嗄（しゃが）れた御返辞が聞えた。

「なぜですか。」

「いま、そっちへお茶を持って行く。」そうしてまた一段と声を大きくして、「襖をあけちゃ、駄目だぞ！」

「でも、なんだか唸（うな）っていらっしゃるじゃありませんか。」私は襖をあけて隣室の模様を見とどけたかった。襖をそっとあけようとしたけれども、陰で先生がしっかり抑えているらしく、ちっとも襖は動かなかった。

「あきませんか。」海軍志願の松野君が進み出て、「僕がやってみましょう。」

松野君は、うむと力んで襖を引いた。中の先生も必死のようである。ちょっとあきかけても、またぴしゃりとしまる。四、五度もみ合っているうちに、がたりと襖がはずれて私たち三人は襖と一緒にどっと三畳間に雪崩（なだ）れ込んだ。先生は倒れる襖を避けて、さっと壁際に退いてその拍子に七輪を蹴飛ばした。薬罐は顛倒（てんとう）して濛々（もうもう）たる湯気が部屋に立ちこもり、先生は、

「あちちちち。」と叫んではだか踊りを演じている。それとばかりに私たちは、七輪からこぼれた火の始末

をして、どうしたのです、先生、お怪我（けが）は、などと口々に尋ねた。先生は、六畳間のまん中に、ふんどし一つで大あぐらをかき、ふうふう言って、

「これは、どうにもひどい茶会であった。いったい君たちは乱暴すぎる。無礼だ。」とさんざんの不機嫌である。

私たちは三畳間を、片づけてから、おそるおそる先生の前に居並び、そろっておわびを申し上げた。

「でも、唸っていらっしゃったものですから心配になって。」と私がちょっと弁解しかけたら、先生は口をとがらせて、

「うむ、どうも私の茶道も未だいたっておらんらしい。いくら茶筌でかきまわしても、うまい具合いに泡が立たないのだ。五回も六回も、やり直したが、一つとして成功しなかった。」

先生は、力のかぎりめちゃくちゃに茶筌で掻きまわしたものらしく、三畳間は薄茶の飛沫（ひまつ）だらけで、そうして、しくじってはそれを洗面器にぶちまけていたものらしく、三畳間のまん中に洗面器が置かれてあって、それには緑の薄茶が一ぱいたまっていた。なるほど、このていたらくでは襖をとざして人目を避けなければならぬ筈であると、はじめて先生の苦衷（くちゅう）のほどを察し

た。けれどもこんな心細い腕前で「主客共に清雅の和楽を尽さん」と計るのも極めて無鉄砲な話であると思った。所詮理想主義者は、その実行に当ってとかく不器用なもののようであるが、黄村先生のように何事も志と違って、具合いが悪く、へまな失敗ばかり演ずるお方も少い。案ずるに先生はこのたびの茶会に於いて、かの千利休の遺訓と称せられる「茶の湯とはただ湯をわかし茶をたてて、飲むばかりなるものと知るべし」という歌の心を実際に顕現して見せようと計ったのであろう。ふんどし一つのお姿も、利休七ケ条の中の、

一、夏は涼しく、
一、冬はあたたかに、

などというところから暗示を得て、殊更に涼しい形を装って見せたものかも知れないが、さまざまの手違いから、たいへんな茶会になってしまって、お気の毒な事であった。

茶の湯も何も要(い)らぬ事にて、のどの渇き申候節は、すなわち台所に走り、水甕(みずがめ)の水を柄杓(ひしゃく)もてごくごくと牛飲仕るが一ばんにて、これ利休の茶道の奥義と得心に及び申候。

というお手紙を、私はそれから数日後、黄村先生か

らいただいた。

底本：「太宰治全集５」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８９（昭和64）年１月31日第１刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
　　１９７５（昭和50）年６月～１９７６（昭和51）年６月
※底本は、「七ヶ条」の「ケ」（このファイルでは、区点番号5-86で入力）を、大振りにつくっています。
入力：柴田卓治
校正：夏海
２０００年11月17日公開
２００４年３月４日修正